平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	２４Ｋ２１	氏　名	佐藤　陽子
研究主題 ―副主題―	通常学級における特別支援教育を円滑に効果的に行うための教育プログラム ―授業ユニバーサルデザインを進めるための教員支援―		
所属校	江戸川区立宇喜田小学校	派遣先	早稲田大学大学院教職研究科

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	平成 24 年に文部科学省が実施した全国実態調査では、小・中学校の通常の学級に在籍している児童・生徒のうち、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示すと担任教師が回答した児童・生徒が、約 6.5%程度の割合で存在する可能性が示されている（文部科学省ホームページ、2012)。これらの児童生徒に対する適切な指導及び必要な支援を学級集団の中で行うことは、学校教育における喫緊の課題となっている。互いの違いを認めつつ、助け合いながらつながっていき、個々の学びやすさを向上させるにはどうすればよいか。４月からの大学院における講義や担当教員からの指導、文献や論文による研究の中で「授業ユニバーサルデザイン」を知った。「授業ユニバーサルデザイン」は、「学びにくさ」を最小限にし、多様な学びを保障することであり、誰かのための支援ではなく、学級全体の、授業の質を高めるための支援を目指すものである。 本研究では、「授業ユニバーサルデザイン」を教員が実践することによって、学級の児童の様子に変容が見られるかを調査する。 これによって、通常学級における特別支援教育を進めていくときに、「授業ユニバーサルデザイン」が有効な手だての一つとなり得るかどうかを検証することを目的とする。
Ⅱ　研究の方法	１　文献研究 小学校における「授業ユニバーサルデザイン」研究について先行論文や文献を調査し、通常学級でも取り組むことができると考えられる例を実習校の教員に紹介する。 ２　臨床実習校での調査 (1)すでに「授業ユニバーサルデザイン」に取り組んでいる事例はないか調査し画像資料として記録しておく。 (2)「授業ユニバーサルデザイン」を紹介するための資料を作成する。(1)で収集した画像資料や児童の困り感を知るための疑似体験も取り入れた資料とする。 (3)「授業ユニバーサルデザイン」を知る前後で、授業のやり方や学級経営のやりやすさに変容が起きたのかを知るための質問紙を作成する。 (4)(3)の質問紙を用いて、現在の「授業ユニバーサルデザイン」の取組状況と、学級の児童の様子を知るための質問紙調査を行う。終了後、②の資料を用いて、教育相談研修会の講師として、「授業ユニバーサルデザイン」を紹介する。

	(5)「授業観察シート」を用いて、授業者の課題意識にそった授業観察を行う。よかった点、改善のヒントについて同じ教諭という立場から特別支援教育の視点を入れた授業コンサルテーションを行い、「授業ユニバーサルデザイン」の実践力向上を図る。 (6) １～２か月後、「授業ユニバーサルデザイン」の取組状況と学級の児童の様子に変容があったかを、③の質問紙を用いて調査する。 ３　結果のまとめと考察
Ⅲ　研究の結果	事後調査紙に自由記述欄を設けたところ、以下のような回答が書かれていた。A教諭「初めて聞いた言葉(授業ユニバーサルデザイン)だったが研修会を受けて参考になった。子供のやりにくさを改善していく努力をすれば、こちらもイライラしないことが分かった。「やらない」のではなく、「できずに困っている」という見方で接することができるようになった。」B教諭「すぐに授業で使えることや、教室の掲示物などについて具体的に教えてもらえた。改めて、自分の指導法を見直すきっかけになった。授業参観もありがたかった」。この２教員以外にも、自分の授業や学級経営を振り返り、困っている子供側に立った視点の獲得に役立ったという意見が複数あった。疑問点や今後の課題として、C教諭「わかりやすく、過ごしやすくなることはわかった。過保護になりすぎない？という気持ちもある。」というように、子どもを甘やかしているのではないかと考えている教員が存在していることも事実である。 調査紙の集計結果は「授業ユニバーサルデザイン」の取組状況平均点は 36.3 点から 39.1 点（57 点満点中）に上昇した。学級の児童の様子平均点も、15.7 点から 21.9 点（30 点満点中）に上昇した。しかし、その伸び幅は、「学級の児童の様子＞授業ユニバーサルデザイン取組状況」であった。 また、事後調査の「授業ユニバーサルデザイン」取組状況を中央値で高群と低群に分け、グループの「学級の児童の様子」平均点の事前事後の伸び方に差が出るかを検討した。その結果、「授業ユニバーサルデザイン」取組状況高群と低群の「学級の児童の様子」の、事前事後の変化の仕方には、差があることが分かった。
Ⅳ　考察	「授業ユニバーサルデザイン」の取組状況平均点と学級の児童の様子平均点がともに上昇しており、「授業ユニバーサルデザイン」取組状況高群は低群より、「学級の児童の様子」平均点が有意に高いことも分かった。「授業ユニバーサルデザイン」は学級の児童の様子の変容に関係していると言える。 ただし、学級が落ち着いて学びやすさが向上していると教員が考えた要因が「授業ユニバーサルデザイン」のみにある、とは言い切れない。１学期より２学期の方が、学級経営も授業もスムーズにいくのは当然であるし、答えているのが教員本人のため、前回よりよくなったと答えたいという心情も働いた可能性はある。 今後、この研究を深める機会があるときには、児童に対して「授業の中で、分かりやすくなった点はどこか」、「学級の様子にどのような変化があったか」も調査対象とし、よりはっきりと「授業ユニバーサルデザイン」を実践することが、学級の児童の「学びやすさ」や学級全体の状態を向上させることを検証したい。